

価値形態論の意味するもの

はじめに

周知のように、マルクスは『資本論』の価値形態論において、いわゆる簡単な価値形態の分析から出発して、「ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この貨幣形態の発生 Genesis を示すこと」(『資本論』第一巻第一分冊、マルクスⅡエンゲルス全集刊行委員会訳、一九六八年、大月書店、六五ページ。以下の引用では、『資本論』、六五ページ、というように略記する。訳文もおおむね、この訳本に拠る)を果そうとした。だが、その展開は悔澁を極め、多義的な解釈をいまだに許している。最近再生しつつある欧米のマルクス経済学においても、それは商品交換の増大のう

ちに貨幣が出現することを、難解な論理によって述べたにすぎないものと解されることが多く、『資本論』の解説から欠落させられたりもしている。これに反して、日本においては、福本和夫、河上肇以来、『資本論』の体系の最も重要な部分の一つとして重視され、解釈が重ねられてきたのである。

だが、その日本においても、マルクス主義の無謬性の神話に支えられて、マルクスの混乱した論理をそのまま繰返すに止まることが多く、価値形態論が経済学の理論にたいして持つ重大な意義が必ずしも十分に明らかにされてきたとは言えない。こうしたなかで、宇野弘蔵は、処女論文「貨幣の必然性」(一九三〇年)以来、マルクスの価値形態論の論理を、純粹資本主義の内部構造の論

渡 辺 寛

理的展開の基本的形態規定をなすものとして把握しつつ、これの再構成に従事してきたのであった。その一、応の完成は一九六四年発行の『経済原論』(岩波全書)に見られるといつてよい。ここで、一、応のと述べたのは、以後も宇野はその死まで原論の各分野についての独立論文等を発表しつつ、詳細な経済原論の執筆に備えていたからである。

ところで、この『原論』を一、応の到達点とした宇野の価値形態論は、おおまかに言って、次の二点でマルクスのそれを修正するものであった。すなわち、まず第一に、『資本論』で価値形態の分析以前に設定されていた労働価値論を、マルクスの方法では論証できないとして、その論証を資本の生産過程の分析へと移したことにある。これによって、価値形態論は、価値の実体としての労働を、その論理に介在させることなく、展開されることになった。第二の点としては、マルクスにおいては、価値形態論のあとの「交換過程」論で始めて登場する商品所有者を、簡単な価値形態で登場させ、その欲望を価値形態の出現とその展開との不可欠の契機として設定したことである。

この二点のいずれも、従来のマルクス主義経済学においては冒すことのできないタブーであったが、宇野のこうした展開によって、ベーム・バヴェルク以来の労働価値論批判はその根柢を失なうことになり、また通俗的ないし形式的取扱いを免れなかった価値形態論の意義とその展開とがヨリ実質のあるものになった。

この小論は、右のような考えを立脚点としつつ、なお宇野において解決できなかった問題を明らかにし、その解法の呈示を意図するものである。^(註)

(註) 同じ対象について、筆者は以下の小論四点によって、マルクス、宇野の論理を検討しつつ、論理的に発生する方法による価値形態論の展開を試みてきた。この小論は、この試みの方法を更に明確化しようとするものである。併せて参照されることを望む。(1) 渡辺寛稿「価値と価値形態」、鈴木鴻一郎編『宇野弘藏先生古稀記念 マルクス経済学の研究 上』、東京大学出版会、一九六八年、所収。(2) 同「価値形態論再論」、日高普他編『マルクス経済学 理論と実証 大内力教授還暦記念論文集』、東京大学出版会、一九七八年、所収。(3) Hiroshi Watanabe, *Logico-Genetical Approximation to the Analysis of the Simple Value-Form*, 研究年報『経済学』第四四巻第四号、東北大学経済学会、一九八三年、所収。(4) Hiroshi Watanabe,

Logico-Genetical Approximation to the Analysis of the
Unfolding of the Value-Form, 研究年報『経済学』、第四
五巻第一号、東北大学経済学会、一九八三年、所収。

—

マルクスがすでに喝破したように、人間は自然にたいして、労働手段を媒介として、労働を対象化することによって、生産物を取得し、それを消費する。これが人間存在のミニマムな必要条件である。しかし、人間はこれを孤立した個人として実現するのではなく、男女の恒常的な性的結合を核とした親族—共同体という、生産と消費との協働体を形成しつつ実現するのである。しかも、人間は、言語活動によって、一方では人間相互間の関係に共同Ⅱ主観的統合を与え、他方では対象的認識を行ないつつ、この労働過程と消費過程とを遂行する。共同体にせよ言語にせよ、いずれも人間が「類的」Ⅱ共同体的存在であることを示すものであって、それらの通時的Ⅱ歴史的变化は、人類学・歴史学と言語学とによって究明されるべきものである。

宇野は、ほぼマルクスの明らかにした人間社会存続の

一般的物質的条件を経済原則という用語で整理したのであるが、社会形態の相異によってその充足の仕方は様々であり、極めて抽象的な規定が与えられる以外には、無定形なものであって、詳細な規定が与えられるわけではない。むしろ、各社会形態が生産力の発展に規定されて自己を形成しつつ、逆に経済原則を定形化し、それに秩序を与えるのである。

資本主義は、それでは、いかなる形式で経済原則を処理し充足するのであろうか。しばしば、この一般的物質的条件ないし経済原則は、資本主義のもとでは資本Ⅱ賃労働関係によって充足させられると言われる。たしかに資本主義の実質をなすのは、まさに資本家と労働者との階級関係にあるといつてよいが、この関係もまた、商品の売買のうちに実現されるのであって、商品流通という形式を必須の媒介とせざるをえないのであった。ここでは、労働過程なり消費過程なりが、人間対自然および人間相互の直接的協働によって営まれるのではなかった。人間が自然に働らきかける前提には商品関係が、人間相互の関係を律するものとして介在せざるをえず、経済原則は、この商品流通の形式によって充足させられるので

ある。

『資本論』の体系が、資本⇨賃労働関係の分析に先立って、まず商品・貨幣・資本という商品経済の基本的流通形態から分析を始めたことは、重大な含意を有するのである。しかも、マルクスは、この商品ないし貨幣の分析にさいして、現実の資本主義のもとでは決して存在することのない、簡単な価値形態を措定し、その解説によって、「すべての価値形態の秘密」、「貨幣の謎も消え去る」(『資本論』、六五ページ)ものとしている。

マルクスの設例では、「二〇ヤールのリンネルは一着の上着に値いする」といった、資本主義のもとでは貨幣を介してしか現われない、いわば商品対商品といった裸の関係が、「貨幣の謎」を説くための、つまり貨幣の理論的展開の出発点として措定されているのである。

したがって、マルクスは、資本⇨賃労働関係(⇨労働力の商品化)という資本主義の基本的生産関係を分析するのに、資本主義の流通表面に存在する、商品・貨幣・資本の分析から、しかも商品の分析では、その要をなす価値形態論において資本主義下では存在しない簡単な価値形態の分析から始めるといふ、二重の意味で方法的に

難かしい問題を提出したのである。

この最初の問題は、宇野によって、商品・貨幣・資本の分析を「流通論」として整序することによってほぼ解決されたのであるが、問題は、価値形態論であった。マルクスによれば、簡単な価値形態において、「商品リンネルの価値が商品上着の身体で表わされ、一商品の価値が他の商品の使用価値で表わされる」(『資本論』、七〇ページ)ことに、商品と貨幣との関係のプロトタイプがあった。彼は貨幣を明らかにするのに、なぜこのような形態を分析しなければならないのかについては触れていないので、この点については後に考察することにして、「一商品の価値が他の商品の使用価値で表わされる」とことについての彼の説明をまず見てみよう。

マルクスによれば、「リンネルの価値をリンネルで表現することはできない」、「つまり、リンネルの価値は、ただ相対的にしか、すなわち別の商品でしか表現できない」(『資本論』、六六ページ)、というのであった。このマルクスの説明を字義通りに解釈すれば、価値は価値では表わせないで、商品の他の要因である使用価値で表わす、といった消極的な意味しか持たないことになる。

一商品の価値の他の商品の使用価値による表現の意味を、マルクスに拠りつつ再発見したのが、宇野であった。

宇野によれば、この形態では「リンネルの所有者が、商品として有するリンネルの内から二〇ヤールをとって、己れの欲する一着の上着に対して、誰か一着の上衣をもつて交換を求めものがあれば、二〇ヤールのリンネルを渡してよい、という形でリンネルの価値を表現するものである」(宇野『経済原論』、二二ページ以下では、『原論』、二二ページ、というように略記する)。ここで彼は、簡潔に、価値形態存立の基礎は、相対的価値形態におかれた商品の所有者が他の商品の使用価値を、交換を介して、欲することにある、としたのであった。ここではじめて、価値形態論に、商品の所有者とその欲望とが明示的に導き入れられた。つまり、商品所有者(ここではリンネル所有者)が他の商品(ここでは上着)の使用価値を欲することに、この価値形態の具体的内容がある、という把握である。これによって、相対的価値形態に立つ商品の価値が等価形態に置かれた商品の使用価値によって表現されるということの、匿された秘密が解かれたのであった。宇野の価値形態論は、ここを出発点と

して論理を構成するのであるが、それについては多くの解説があるので、ここではこれ以上立入らない。

しかし、すべての科学的営為がそうであるように、宇野の見解も、未解決の問題を残すものであった。それは大きくいって二つあり、いずれも、方法上の問題に係わる。

その第一。すでにマルクスについて触れたところであるが、なぜ、資本主義のもとでは、そのままのかたちでは見られない簡単な価値形態を、貨幣の謎解き、つまり貨幣の必然性の解明のために指定しなければならぬのかという疑問である。宇野は、『資本論』の論理に混在している資本主義の生成、発展、消滅の叙述を除去し、『資本論』を純粋資本主義の内部構造の論理的展開として整理しようとしたのであるが、こうした観点からするとき、冒頭の商品論において、彼の『原論』のほぼ出発点を資本主義のもとでは存在しない二商品間の形態から分析することは、彼の方法とは全く背馳すると見られても仕方がないであろう。宇野は、この点について、先の短い引用の直前で次のように述べている。「こういう表現は、しかし、資本主義社会はもちろんのこと、一般に

商品売買の形式としても直接的には見ることはできない。金何円という価格形態の背後にある未発展のものとして考えられるにすぎない。しかしまたそれは、いわゆる物々交換に見られるような、リンネル所有者と上衣の所有者とが現実に対立し、相互にその所有物を交換するといふ、いわば双方の価値を互に表現するという関係そのものをいうのではない(『原論』、二二ページ)。

ここでの、「金何円という価格形態の背後にある未発展のものとして」、簡単な価値形態を想定するのは、どのような方法に基づいているのか? 言い方を換えれば、純粹資本主義の分析を課題としながら、それを果すために、なぜ「未発展のもの」の分析をしなければならぬのか? と設問することができよう。しかし、宇野もマルクス同様、こうした設問にたいしては、方法上の回答を与えていないのである。そこで以下この設問を考^(註)えてみなければならない。

(註) 厳密に言えば、宇野は、『資本論五十年 下』(一九六九年、法政大学出版局、七六二—七九ページ)において、發生的の方法に言及している。

ひとたび成立した資本主義のもとでは、もろもろの経

済カテゴリーが相互に規定しあい、原因となり結果となつて循環し運動していて、その因果の連鎖を解きほぐすことは極めて難かしい。すでに形成されてしまった資本主義の経済構造を、理論的に、解体し再構成するためには、特殊の方法を必要とする所以である。マルクスは、それを商品の単純な規定を出発点として、商品・貨幣・資本の論理的展開のうちに再構成したのであった。この問題を宇野はマルクスに即しつつ更に方法的に明確化したといつてよい。商品・貨幣・資本という流通諸形態は、資本主義的生産過程を措定することなく、理論的に措定、展開できるといふのが、その視点であった。そして、事実としても、これらの流通諸形態は、資本主義的生産に先行する諸社会形態のうちにすでに成立していたのである。ここで、マルクスが、そして宇野が實質的に——必ずしも意識的ではないにせよ——採つた方法は、後述するような、論理的に發生的認識方法であつたように思われる。しかし、小論の課題は、これら三大カテゴリーの分析ではなく、価値形態のそれにあるので、考察の対象を価値形態に絞らなければならない。

形成された構造の自己運動体である資本主義では、い

ま触れたように、経済諸カテゴリーが相互に規定しあう因果の連鎖をなしているのであるが、こうした事態は、その第一カテゴリーである商品をとってみても同様である。『資本論』の冒頭で、「資本主義的生産様式が支配的に行なわれている社会の富は、一つの『巨大な商品の集まり』として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる」(『資本論』、四七ページ)と述べ、分析対象に資本主義下の、完成した規定性を有する商品——を据えた。この商品は、通常二要因——価値と使用価値——を持つものと規定されており、したがって簡単に把握できる、単純な構造のもの——構造とすら言えないもの——と考えられている。しかし、古典派経済学以来のこうした二要因説をひとたび白紙に戻し、既成の固定観念を捨てて、商品をリアルに見たらどうであろうか。

「商品は、種々異なったものとして、それぞれ特定の使用目的に役立つ」使用対象としてありながら、「すべて一様に金何円という価格を有している」ものとして、認識できるはずである(『原論』、二一ページ)。

古典派経済学伝来の、商品をモノとして把握し、それ

に二つの内的属性としての価値——使用価値と交換価値——があるとする超歴史的で平板な把握を拒けて、現実の商品を直視すれば、商品は、種々異なった使用対象としてありながら、いずれも金何円という価格を持つものとして存在していることが認められるのである。もちろん、この場合使用対象といっても、それはその所有者にとってではなく、他人にとっての使用対象という限定を受けるのであるが、こうした限定を受けたからといって、使用対象自身の性質が変わるわけではない。これに反して、価格とは、その商品所有者が、貨幣の一定量とであれば、その商品を交換するという主観的評価であって、この価格というカタチこそが、使用対象を商品たらしめるのであって、他人のための使用対象という限定も、このカタチとともに出現するのである。したがって商品の本質は、価格にあると言わなければならない。そして、その価格とは、貨幣という他者の一定量でしか示すことのできないものなのである。言い換えれば、他者の一定量をもって自己の本質とするところの、「つかまえない」(『資本論』、六四ページ)、理解し難い存在なのである。

商品を右のように規定しなおすとすれば、そこから次

のような問題が浮び上ってくる。つまり、なぜ、商品と
 いう存在は、貨幣という他者をもって自己の本質とする
 のであるか、と。他者をもって自己の本質とする、この
 商品の構造を説明するための、方法がここで問われなけ
 ればならない。もし、われわれが、視野と視点とを、完
 成した資本主義下の商品に局限するとすれば、そこから
 展開される商品の分析とは、需給の変動に伴なう価格の
 変化といったようなものにすぎなくなるであろう。形成
 された構造としての資本主義、その細胞として、同じく
 形成された——貨幣との関わりを自己のうち取り込みつ
 つ形成されている——商品の本質を解析するためには、
 その構造が形成され層を成している、その層を解体して、
 基層を発見しなければならぬのである。しかし、ここ
 で難かしいのは、建築物の基層でもあれば、屋根から
 順々に構造物を解体してゆけば、自ずからそれが現われ
 るのに対して、商品の場合、現実存在するのは、価格
 という形態だけであり、価格というカタチを除去すれば、
 そこに残るのは使用対象に過ぎないものになることにあ
 る。つまり、基層は価格のなかに止揚され溶解してしま
 っており、建築物のように、基層がそのまま目に見える

かたちで存在していたわけではないからである。

この目には見えない基層を発見し、そこから価格とい
 う形態への発展を明らかにする方法こそ、マルクスが事
 実として、価値形態論で採用した、論理的に発生的認識
 方法に他ならなかった。認識者の目をね返す、完成し
 た、この固い構造の分析、マルクスの言明によれば、
 「人間精神が二千年以上もまえから空しくその解明に努
 めてきた」「価値形態」の分析にさいして、彼の用いた
 「抽象力」(『資本論』、七—八ページ)の内容をなすのは、
 事実上この方法であった。すなわち、完成した商品の構
 造を認識するために、商品と貨幣との関係を、「論理的」
 に最も単純で基本的なものに抽象していくわけであるが、
 この場合、単純といふ基本といっても、基準の採り方に
 よっては異なったものになるであろう。ここで、論理的
 に最も単純で基本的なものに遡及するさいに、その論理
 を更に制約し、それに基準を与えるのが、「発生的」方
 法である。マルクスは、商品の価値形態を「経済的細胞
 形態」と呼んでいるが(『資本論』、八ページ)、その
 「細胞」——ここでは価格であるが——の構造を理解す
 るためには、それを発生的オーダーに即して把握しなけ

ればならない。

マルクスが資本主義においては、そのままのカタチでは存在しないところの、簡単な価値形態の分析から始めたのは、まさにこの方法によってであった。マルクスの場合、その方法が「抽象力」という漠然とした表現で、そして宇宙の場合も、「価格形態の背後にある未発展のもの」の分析というかたちでしか、この方法が述べられていない。ところで、冒頭の商品の規定から価値形態論への移行は、従来考えられてきたように、決して抽象から具体への移行ではなく、むしろ、具体的な商品存在の規定から論理に發生的に抽象的な単純な価値形態の規定へと「下向」するのであるが、この点も、方法が意識的に明確化されなかったために、曖昧なままにされていたのである。管見の範囲であるが、冒頭の商品の規定から価値形態への移行が、論理の下向であることを指摘したのは、おそらく杉本榮一が最初であった(杉本榮一著『近代経済学史』、一九五三年、岩波書店、二八五―六ページを参照)。

この發生的方法は、実は、対象自身の性質によってもたらされたものであった。すでに指摘したところ

あるが、商品・貨幣・資本という資本主義の三大カテゴリーは、いずれも流通形態としては資本主義以前に形成されていた。したがって、それ自身は資本主義的生産関係の分析を前提することなく分析できるのである。もちろん、これらの基本的カテゴリーが社会関係を支配することによって、その科学的認識が要請され実現されるのであるが、歴史的に形成された構造としての資本主義の分析にさいして、まず資本主義的生産関係の分析からではなく、これら流通諸形態の分析から始められるし、またそうしなければ、資本主義的生産関係も分析できないのであるが、それは、歴史的形成本体として、成層をなす構造を自己のうちに止揚し保存している資本主義という対象自身の性質によって根拠づけられているのである。

そして、同様のことは、この三大カテゴリーの始点をなす資本主義的商品自身の構造のうちにも、いわば入籠(nested boxes)式に存在する。商品・貨幣・資本の三大カテゴリーを、宇野はその『原論』において「流通論」という箱にまとめて入れ、流通形態というデザインで総括したのであるが、この箱のなかにある商品という小箱自身が、やはり、類似のデザインを持っているのである。

つまり、発生的方法による、商品構造の、解体と再構成がそれであった。マルクスが、資本主義的商品を認識対象に据えて、その現存の価格という形態の背後に、すでに溶解してしまっていて、そのままでは存在しない簡単な価値形態を、「すべての価値形態の秘密」の生ずる基層として見出したのであるが、このとき、彼が事実上採用した方法こそ、論理的に発生的方法であった。

さて、この方法を商品論に即して、いま少し述べてみよう。マルクスは、商品の実際上の発生は、共同体間の接触に見られ、その間隙と解体とを媒介として発展することを、『資本論』の随所で強調していた。商品は、社会の内部からではなく間の関係から発生するという認識は、商品の構造を孤立して考察するのではなく、簡単な価値形態という二商品間の関係のうちに考察するというかたちで、理論化されたのである。つまり、共同体間での商品関係の発生と展開という事態が、資本主義のもとでの商品の構造を論理的に単純で基本的なものに抽象化する場合の、その抽象の方法に基準を与えることになる。そして、二商品間に始まる商品関係の拡大と貨幣の出現という事態、この時間的Ⅱ線の発生オーダーは、簡単な

価値形態に始まり貨幣形態Ⅱ価格をもって終点とする重層的構造として無時間的Ⅱ面的に商品の価格という形態のうちに埋め込まれているのである。

誤解を避けるために言えば、こうした方法は、いわゆる単純商品生産説のように、歴史的に資本主義に先行する社会として、ないしサブ・ウクライドとして単純商品生産者の社会を想定したり、あるいは指定したりするのではない。また、この方法は、いわゆる世界資本主義論のように、資本主義の重商主義段階を「内的に模写する」ものでもない。商品はもちろん、貨幣にしても資本にしても、それ自身でなら歴史的画期を形成するものではないからである。資本主義に先行する諸社会において、これらのカテゴリーは、商品・貨幣・資本の発生オーダーで、そして商品自身は、二商品間の関係を始点とする発生オーダーで、出現し、消長を繰返しながらも、存続してきたのであった。われわれが、発生的、マルクスのいう *Cases* の方法を、資本主義の原理的規定で採用するのは、論理的に、基本的なものを探り出し、再構成するための、その論理化に基準を与えるための方法に他ならなかったわけである。そして、マルクスにしても、

宇野にしても、価値形態論の方法を明確にかかるものとして明らかにしなかったために、例えば「価格形態の背後にある未発展のもの」の解明がなぜ、資本主義のもとの商品の分析に必要であるのかも、不明確なままに置かれることになったのである。

二

宇野の未解決の第二の問題に移ろう。それは、価値形態論を「価値表現」の展開として把握するマルクス以来の考えを、彼も基本的に踏襲していることである。先にも引用したが、重要なセンテンスなので、いま一度引用しよう。簡単な価値形態では、「リンネルの所有者が、商品として有するリンネルの内から二〇ヤールをとって、己れの欲する一着の上着に対して、誰か一着の上着をもって交換を求めめるものがあれば、二〇ヤールのリンネルを渡してよい、という形でリンネルの価値を表現するものである」。ここで、最後の、「という形で」以下を別とすれば、簡単な価値形態でのリンネル商品所有者の置かれた事態は、明瞭に判るであろう。だが、こうした事態が、どうして「リンネルの価値を表現する」ことになる

のであろうか。もちろん、リンネル商品所有者は、自分の商品の価値を「表現」するために、わざわざ「一着の上衣」を欲するのではない。交換を介しての自分の欲望の充足こそが、リンネル商品所有者の唯一の動機である。宇野は、こうした動機に即した行為が、結果として価値を表現することになると考えていたのであろう。だが、この動機と、その結果と想定される価値表現との間を繋ぐ論理を、『原論』に見出すことはできない。結論を先取して言えば、宇野は、マルクスと同様に、冒頭の商品の性質を、価値と使用価値の二要因として定義してしまっていたために、以後の論理の展開の基軸はこの「価値」がどのように「表現」されるかということに絞られてしまった。したがって、簡単な価値形態の事態をリアルに描出しながらも、木に竹を接いだように、「という形で」以下の価値表現の規定が接続することになったと思われる。

そこで、われわれは、マルクスが発見し、宇野が再調査をした、簡単な価値形態の発生の現場——もちろん理論的現場——に再度立ち戻ってみよう。宇野の明らかにしたように、ここではリンネル商品所有者が、自分の所

有していない一着の上着を欲し、そしてそれを取得するために自分のリンネルのうちから二〇ヤールを譲渡したい、という事態が出現していた。この形態の発生の現場では、リンネル商品が自己運動するのではなく、その所有者が自分の欲望を充足しようとする動機が形態発生の動力であることが、初めて明示された。これは余りにも当り前のことのように思われるが、従来のマルクス経済学ではモノの關係によって社会關係が規定されるといった公式が支配していたために、形態形成の理論的に具体的な把握方法を、われわれ自身が自分の思考領野の内部で抑圧し続け、それによって見えるものも見えなくしてしまっていたのである。

さて、「価値表現」という固定観念を白紙に戻して、この現場を更に考察してみよう。ここで、リンネル所有者は、自分の欲する非所有の一着の上着をどのように表象するのであろうか。それは、自分の所有していない、有難いもの、値打ちのあるもの、valuableなものとして、表象されるであろう。ここで注意しなければならぬのは、単に抽象的に価値あるものとして表象するのではないということである。自分のリンネルのうちの二〇

ヤールと引き換えに入手しうるかも知れないものとして、価値あるもの、価値物という表象が生ずる。つまり、一着の上着が、リンネル商品所有者の観念のなかで二〇ヤールのリンネルにとっての価値物となる。一着の上着の使用対象というモノ自身が、リンネル所有者の編み出すとする私的社會關係のなかで——そしてそのなかでのみ——、価値というコトに成ってしまうのである。

それでは、所有者の手元にあるリンネル二〇ヤールは、どのように変貌するのであろうか。一着の上着＝価値物、という観念の形成過程は同時に、リンネル二〇ヤールを「渡してよい」、つまり交換してよい、という動きを前提としていた。この場合、どうして自分のリンネル二〇ヤールが一着の上着にたいして交換を申出ることができるのであろうか。それは、一着の上着にたいして、自分のリンネル二〇ヤールが同価であるという、リンネル商品所有者の「主観的評価」(『原論』、二五ページ)によるのである。ここでは、その「評価」の基準が、対象化された労働の比較によるのか効用によるのか、あるいは他のなにかによるのかは、差し当って一切不明であろう。リンネル所有者は、なんらかの基準——基準自身が動き

うるのであるが——によって、リンネル二〇ヤールが一着の上着と同価であると評価するのである。

ここで注目すべきは、マルクスが相対的価値形態と等価形態との両極が相互に制約しあい、かつ排除しあう両契機であることを強調している点である。相互制約は、一着の上着が価値物であるのはリンネル二〇ヤールとの関係の内部においてのみであることを意味しているのであるが、相互の排除とはどのように考えればよいであろうか。マルクスは、相対的価値形態に置かれれば、それは等価形態に置かれることを排除するという意味で、そう規定しているのであり、それはその通りであるが、いまそうした事態が、商品所有者のどのような観念に対応するかを考えてみなければならない。等価形態に置かれた商品が、この関係のなかで価値という観念の結晶をもたらしたとすれば、相対的価値形態の商品においては、その価値物との交換において同価であるという観念の結晶を生ぜしめるにちがいない。つまり、交換価値 *value in exchange* である。その発展したものが価格に他ならないわけであるが、等価形態と相対的価値形態という対立的事項——相互に制約しあいかつ排除しあう両事項は、

価値と交換価値という対立的辞項、示差性に対応することになる。この示差性のなかにおいてのみ、それらは価値であり、交換価値であるのであって、価値なり交換価値なりは、この辞項対立をヌキにして存立しはしない。商品所有者における価値と交換価値との観念は、とりもなおさず、マルクスのいう「商品語」のうちに、コトバとして定着する、つまりカテゴリーが成立するのである。ひとたび価値として結晶した、この商品語は、商品世界における規範(Ⅱコード)として、個々の商品所有者の意識と行動とを規制することになる。一着の上着Ⅱ価値物によって、リンネル二〇ヤールの交換価値が表示される、簡単な形態は、貨幣と商品という発展した形態においては、金の一定量Ⅱ一単位当りの商品の価格、となるのである。

前述した人間存在の必要条件たる言語活動は、モノにたいする欲望を商品経済的廻り道によって充足させる、この奇妙な形態を、特有の「商品語」の派生によって媒介し、コード化することになる。マルクスは、この点についても、極めて注目すべき言明をしているので、紹介しておく。

「ときに商品価値の分析がわれわれに語ったいっさいのことを、いまやリンネルが別の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは自分の思想をリンネルに通ずる言葉で、つまり商品語で言い表わすだけである。労働は人間労働という抽象的屬性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルに等しいとされるかぎり、つまり価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成っている、と言うのである。自分の高尚な価値対象性が自分のごわごわした肉体とは違っているということを言うために、リンネルは、価値は上着に見え、したがってリンネル自身も価値物としては、上着にそっくりそのままである、と言うのである」(『資本論』、七一ページ)。

ここで、マルクスは、価値の実体が労働であることを先取し、したがって価値形態の課題はその価値の表現の展開を考察することであるととしたために、更にまた、商品所有者を措定しなかったために、その文意が必ずしも明確になっていないが、マルクスの言明を、リンネル所有者を登場させて補足すれば、「リンネル所有者は自

分の思想 Gedanken をリンネルだけに通ずる言葉 Sprache で、つまり商品語 Warensprache で言い表わすだけである」となるであろう。ここで、マルクスは、社会関係を支配するにいたる価値が、一定の事態のもとでの人間の言語活動によって産出された、社会的コードであるという認識に近付いていたといえるのではない。そして、その認識を完成させなかったのは、当面の対象に限って言えば、価値形態論における商品所有者の捨象に、その原因があったのである。「リンネル自身が語る」ことなどありえないのに、それに語らせようとしたマルクスが、おそらくそこで気が付き始めていたことにこそ、われわれは注目しなければならないのである。

個々の商品所有者が、自己の商品とのかかわりのうちに、等価形態に他商品を置くことによって、それに送ったメッセージ、自己の商品は等価形態の商品と交換において同価であるというメッセージは、価値という私的社会的コードを、等価形態にある商品の使用対象に付着させるわけであるが、価値形態の展開は、このコードの支配領域を拡大し、コードを作成したメッセージの送り

手自身を深く従属せしめてゆくことになる。簡単な価値形態においては、価値というコードは、リンネル所有者の欲望充足とともに消失する一過的な性質のものに過ぎなかったのに対して、貨幣形態に至ると、商品所有者自身の直接的欲望は後景に退き、宇野の明らかにしたように、「リンネル—ヤールは金幾何とか、茶—ポンドは金いくらかというように」、「それぞれの商品の使用価値の単位量によって」(『原論』、二八ページ)、その価格を表示する。つまり、商品所有者は、自分の欲望を充足させるのに、自分の商品を販売して価値物たる貨幣を入手し、ついで自分の欲する商品を購入する。欲望の充足自体が、もともと簡単な価値形態においても間接化されていたのが、更に貨幣の入手を媒介として、いま一つ間接化されることになる。貨幣という、本来的欲望の対象ではないものの入手が、欲望充足の先決条件となり、こうして、貨幣の入手自体が、欲望の対象となるという、商品経済的倒錯が行動の規範と化する。しかも、こうした事態は、貨幣で完結するのではない。貨幣をヨリ多くの貨幣として回収する、価値物の自己増殖する運動体たる資本に至って、この倒錯は極点に達するのである。人間

存在の超歴史的条件たる労働Ⅱ生産過程を、価値増殖のための手段に転化するという事態は、この倒錯を全社会的規模で確立するものに他ならなかったのである。

そしてこの倒錯の全過程の理論的再構成は、労働Ⅱ生産過程という人間社会存続の必要条件、宇野のいわゆる経済原則が、価値・貨幣・資本というコードによって、取えて言えば商品経済的に歪んだコードによって、定形化され、かつ再布置化される構造を示すものに他ならない。もちろん、資本が労働Ⅱ生産過程を把握するとともに、本来労働Ⅱ生産過程とは直接には関わりなく、その外部で発生した価値が、その実体として労働を包摂せざるをえなくなる。ここに価値法則が根拠づけられることになる。だが、価値と労働との照応関係も、資本相互間の競争という現実の象面においては、いわゆる「生産価格」という、価値の、理論的にはヨリ具体的な規定のうちに、資本家社会的に歪められたかたちのうちに埋没せしめられることになる。

翻って考えてみれば、簡単な価値形態が開示したように、商品経済による、そして資本主義による、経済原則の充足は、直接に労働Ⅱ生産過程を把握することによっ

てではなく、モノにたいする欲望の充足を、他者のモノを価値というコードと化するという奇妙な方法によって、間接的に実現することを、プロトタイプとするものであった。労働Ⅱ生産過程を核とする経済原則を定形化し、再布置化しつつ資本主義は、それを充足するのであるが、この定形化・再布置化・充足が、本源的には労働Ⅱ生産過程とは内的関係を持たない、諸コードⅡ経済諸カテゴリーに拠っていることは、結局のところ、これらのコードでは包摂しきれない「過剰」(宇野のいわゆる労働力商品化の「無理」)を基礎として、資本主義の基本的矛盾を発現せしめるのである。価値形態論は、資本主義を支える基本的カテゴリーⅡコードを、そのプロトタイプにおいて開示し、資本主義の科学的分析に、揺ぎない基礎を与えるのである。

おわりに

商品・貨幣・資本、という資本主義の三大カテゴリー、そしてその始点をなす商品の構造は、マルクスによって殆んどはじめて科学的分析のメスを加えられたのであった。そして宇野がこれをいくつかの点で補足・訂正した

といつてよい。しかし、すべての科学的営為がそうであるように、彼の営為もまた、検討の余地を残すものであった。ここでは、それを方法上の問題に焦点を絞って考察した。論理的Ⅱ発生的方法によって、未決の問題に踏み込もうとしたのであるが、この問題についての従前の拙稿より多少の前進をしたつもりではあるが、この方法を未だに十分に説得的に述べるには至っていないようにも思われる。以前の稿についても、数多くの批判をえたが、本稿についても批判をいただければ幸いである。

なお、このテーマでの最初の二小論執筆後、ピアジェの発生的認識論によって、筆者の考えを更に展開するの役に立てることができた。第三、第四の小論がそれである。その後、本稿の執筆に至るまでに、丸山圭三郎とG・ムーナンの著作を介しつつシュールの言語理論に接することができ、本稿の論旨は多少ともそこから摂取している。もっとも、基本的考えは、最初の小論から変わっていないが。しかし、いずれにせよ、ピアジェとシュールについての筆者の理解は我流のものであり、そこからこれまた我流のヒントを得たに止まる。また、現在の筆者には、この両者の体系にたいして、全体的な評

価を下すことは、できないことも、言い添えておかなければならない。

—・—・—

鈴木秀勇先生には、高島先生の御病気のため、代りにゼミナールで指導をいただいた。そしてゼミ以外でも、友人岩井昭二とともに厚かましくもドイツ語の個人指導をお願いにあがったのを、ころよくお引受け下さり、先生には、そのために一九五二年の夏の暑い盛りを、われわれ、それも主として私のためにお割き下さった。今更ながら深くお礼を申上げる次第であります。爾来三十

有余年、先生には、一橋の圖書の貸出し等のために——これも先生の御手を煩わすことになったのであるが——国立を訪れたさい数度お会いにしないで、打ち過ぎてしまった。八四年三月、先生の御退職の会で十数年ぶりでお会いすることを得たが、先生にはことのほか御元氣であらせられた。先生のこれからの人生の御加餐を心からお祈りする次第であります。

(東北大学教授)